

パネルディスカッション

テーマ一
テーマ二
テーマ三
テーマ四

- 鞠智城の創建年代をめぐって
東アジアと鞠智城の関係をめぐって
鞠智城の運営をめぐって
鞠智城の目的・機能をめぐって
-



写真 14 パネルディスカッション福岡会場

コーディネーター
佐藤 信 (さとう まこと)

東京大学大学院人文社会系研究科教授。

パネリスト

小田 富士雄 (おだ ふじお)
福岡大学名誉教授、大宰府史跡調査研究指導委員会委員長。

石井 正敏 (いしい まさとし)
中央大学文学部教授、中央大学人文科学研究所長、中央史学会会長。

坂井 秀弥 (さかい ひでや)
奈良大学教授。

佐

藤　只今ご紹介いただきました佐藤です。どうぞよろしくお願ひいたします。本日はこれまでに、小田さん、石井さん、坂井さんにご発表いただいたわけですが、それを踏まえてディスカッションをしたいと思います。実は今回のシンポジウムの前に、八月二六日にも熊本市を会場にして地元の八五〇人の方が参加されたシンポジウムがありまして、その時と今回の二回で全体のシンポジウムが構成されると思います。シンポジウムの題名が「ここまでわかつた鞠智城」ということで、今年の三月に刊行された大変立派な熊本県教育委員会の鞠智城跡発掘調査の総合報告書『鞠智城跡Ⅱ』を踏まえて、今回こんなにもいろいろなことがわかつてきましたという方向でお話を進めるつもりでいました。実際、前回と本日の先生方のお話を伺つて、いろいろなことが本当にわかつてきたと思います。これは本当に一九六七年以來の発掘調査の成果だと思います。しかし、それによつて多くのことがわかつたらわかつたなりに新しい疑問も出てきて、まだこういうことも研究しなくてはならないというテーマもたくさん見えてきたというところがあります。本日はこれからパネルディスカッションでテーマとする四つの章立てを考えできました。一つは鞠智城の創建年代をめぐる話。二つ目は東アジア、あるいは朝鮮半島と鞠智城の関係をめぐる話。三番目は鞠智城の運営をめぐる話。それから四番目は鞠智城が何のために築かれどういう機能を果たしたかということを、議論したいと思います。すでにお疲れだと思いますが、少し頭を働かせていただきたいと思います。まず最初に、鞠智城の創建年代をめぐるというテーマです。今日小田さんは歴史考古学というお立場で創建年代を六六七年と限定してお話になりました。私もアッと思いました。もう一度小田さんの方から、鞠智城の創建を六六七年とみる理由、それから創設に際して誰が主体であつたかということについてご説明いただきたい。私などは大野城や

小

基肄城と同じように百濟の亡命将軍の指導の下に建てられた可能性を考えていた時がありますけれども、その際にヤマト王権がもちろん主体ですが、百濟の将軍がどう関与したか、あるいは大宰府がどう関与したか、あるいは地元の肥後国の地方豪族がどのように関与したかという問題があります。歴史考古学的な見地から、創建の主体についてお話をいただけたとありがたいのですが。

田・大変難しいテーマを持つてこられましたが、創建年代につきましては先ほども申しましたように、まず最初のとつかかりは私の資料二八頁に朝鮮式山城の推移という年表ふうに『日本書紀』や『続日本紀』から選んで出しておきました。その中で普通この防衛施設を造るとすれば、唐や新羅が攻めてきますから朝鮮海峡に近い方から造つて来るだろうと。そうすると一番最初に対馬の金田城を築城するものが普通じやないかと考えたのです。どうして大野城、基肄城よりも遅れて出てくるのか、むしろ高安城とか屋嶋城などの瀬戸内海から近畿の入口辺と同列に並んで出来たのはどういうことかということからはじまつたのですね。そうしますとどうもこの年表だけでは解けませんので、この背景になる当時の東アジアの状況がどうかというようなところで、幸いにもこの『善隣国宝記』という室町時代に出来たお坊さんの書いた本がございまして、その中にこれはもうこのへんの研究をやる人たちにはみんなご存知ですが、『海外國記』という当時の文章が残つていてそういうものが引用されているというところからみますと、唐は高句麗征討、第四回でしたか、高句麗征討を控えている段階でして、一説にはそのための援軍を求めてきたのではないかという説もありますが、平和外交の方向に、少なくとも唐の敵にはならないというところまではとりつけたというようなことが当時の東アジアの情勢の中で出てくる。それを踏まえますと、まず水城が出てきますようにまず大宰府の都城制というもの

をしつかり造ること。これは当時の中国や朝鮮の方の状況から見ましても、律令国家の形成を目指しておるどころですから、律令国家の形成ではやはり都城制というようなものを完備していくというのが常道です。最初に九州に来た大陸からの使節がまず目にするのが大宰府というところがどこまで整備されているかということになります。というような論法で考えていつたわけです。そうしますと大野城、基肄城などを中心にした大宰府都城制というものがまず考えられる。それからすぐ攻めてこられるという状況が遠のいたというところから、大宰府都城制を完成してこの際に他国にも劣らぬ都城制国家というものを印象付けようというところ。これが一番の目的ですが、次に第一の外郭として、取り巻く金田城、鞠智城が出てくる。それから大和に至るという考え方をするならば、これは百済の高官連中が来て造っているというところからすれば扶余の百済の王宮と同じような形態が辿られるということ。それから鞠智城に関してもおそらくこれは百済の高官が大野城、基肄城、金田城などと同じように関係しているであろうと考えていたところに、最近幸いにして城内の池から百済の仏像が発見されたということですね。これは美術史の大西さんなどに取り上げていただいたように、百済のしかも白村江の戦いのその前後あたりに考えていい仏像だそうです。これは百済の仏さんですから、たぶん百済の高官たちが来る時に念持仏として持ってきたものではないかということなどここまで話が発展してきました。そういうところから考えますとやはり大野城と同じように百済の高官たちが関係しておるであろうということですね。特にこの鞠智城の場合は低いところにありますから、これは逃げ込み城だけでなく、今度は出撃していくのにも非常に便利な立地を選んでいるということですね。これは百済の方の山城を研究する人たちとも話しましたら、やはりそういうところでは考えがほぼ一

致しております。

佐藤…ありがとうございます。出撃のための城でもあるのではないかというご指摘にハッピしました。

小田さんはご報告の中では瓦のあり方とか門の基礎石の唐居敷のあり方などから大野城より少し遅れて鞠智城が造営されるとおっしゃつたと思いますが、そういう一つひとつの考古学的な詰めの上ではじめて創建年代がだんだんとわかつてくるのかなと思つております。考古学的な見地で言うと、坂井さん、鞠智城の創建についていかがお考えでしょうか。

坂井…私はほんどこちらの考古資料をつぶさに見ていないので、的確にお答え申し上げにくいのです
が、記録から見ると六六五年から六七〇年くらいに朝鮮式山城を造営している期間がありますが、報告書に掲載されている遺物を見る限り、やはりその中におさめて考えて問題がない、妥当だと思います。ああいうものが出来た背景を考えるには



写真 15 パネルディスカッション福岡会場

やはり白村江の敗戦があつて、大きな危機の中で大宰府防衛の大野城、基肄城とともに考えるのがやはり妥当ではないかと。ただ、鞠智城が大野城などと同時なのか二年とか三年とか違うのかといわれる、私自身にはそれを判断する根拠は持ち合わせないというところであります。

佐藤：ありがとうございます。六九八年の『続日本紀』の記事に、「大宰府をして大野城と基肄城と鞠智城の三つの城を繕わせる」、修理させるという記事があるので、おそらく大野城、基肄城と一緒に鞠智城も一定年代が、三〇年ちょっとでしようか、経つて傷んできたと考えられます。それ程はズレないで、鞠智城は、大野城や基肄城に近い時点で築かれたということは文献的には間違いないのかなと思います。石井さん、対外関係の面から考えた創建の時期ということはいかがでしょうか。

石井：私も特に意見持ち合わせていないのですけど、先ほどの私の報告の中で大宰府防衛という言葉には二つの意味がありますということでお話をしましたが、いわば大宰府を天守閣とするような考え方、それともう一つは大宰府を中心とした防衛網、こういう考え方でいくと今の小田先生のお話を非常に興味深く伺いました。といいますのは、つまり最前線である大宰府を守る配置とそれから畿内を守る防衛体制、この両面から山城の創建時期であるとかそういうものを考えていくと少し面白い問題が出てくるのかなと。従いまして私も例えば最前線である金田（城）が対馬に築かれた、まずそういうのが先にきていいはずだと思いますが、まずやつたことは大宰府周辺からはじめている。そうしますと二つの防衛網の考え方、何か適応できるのかなと、そんな感じを抱いていますね。

佐藤：鞠智城は大宰府より約六〇キロ南にあります。やはり防衛のための前線基地とみていいでしようか。
石井：有明海方面からの脅威というものを強調されるのは実は佐藤先生なんですね。ですから僕も佐藤さ

んの考え方、これを敷衍する形で九、一〇世紀に及ぼしたというような内容なのですけれども、やはりそうした意味では大宰府から見れば後背地になりますね、そういう位置として非常に重要な意味を持つていて。そう捉えていいのではと考えておりますので、これも先ほどのままで最前線の大宰府を防衛する、そういう観点からこの鞠智城が築かれている可能性があるのでないか、そのように私は理解をしております。

藤：先ほども申し上げたのですけれど、鞠智城の造営時期というのは、前回のシンポジウムでも話題になりました。これまで当然のように白村江の敗戦の直後と考えていたのですが、もう少しきちんと考古学的にも詰めて検討していくことが必要ではないかということですね。小田さんの場合は、本日、厳密な年代もご提示されたわけですけれども、そのあたりのことを詰めていくことがこれからさまざまなる分野での課題になるものと思います。その中で先ほどふれた造営の主体ということも、さらに明らかになってくるものと思います。そこで、次の東アジアと鞠智城との関係をめぐるテーマの方に移りたいと思います。これは小田さんのお話の中で、私は大野城、鞠智城の瓦は百済の系統の瓦と思っていましたが、高句麗系の百済瓦と位置づけていただきました。瓦については小田さんが第一人者であります。私は無前提に百済の亡命将軍だから百済式の瓦かと思つていたところがあつたのですが、百済も実はそれ以前に高句麗からの影響で仏教文化が広まつた経緯もあります。新羅についても高句麗系の新羅瓦というのがおそらくあるのだろうと思いますが、一元的に百済から來たらすぐ百済式というわけではなく、「高句麗系の百済瓦」とおっしゃったので私はハッとした。朝鮮半島の三国も、必ずしもフラットに見るのではなくて、歴史的な変遷の中で三国の文化というものを見なくてはいけ

ないと今日勉強いたしました。小田さん、もう少し高句麗系百済瓦につきまして、高句麗系百済瓦ではない百済瓦というのもあるのでしょうか、そのあたりを教えていただけるとありがたいのですが。

田：この中で今言われたのは資料篇で三八から四〇頁というところです。さらに少し戻つていただいて三四頁の水城の下の基肄城の瓦です。これを見ていただきたいのです。最初の大野城の主城原、これは先ほど坂井先生の方から管理棟の話が出ておりましたが、主城原というのは大野城の中の真ん中より少し北よりの高いところにあります。そこから発見されました建物の構造を三三頁の左側に出しております、以前からこれは官衙風な建物だということが言われておりました。ここから出てきたのが三八頁に出ております上の段の瓦です。それからその後、現在大宰府政厅の領域の官衙地区、なかでも日吉地区などの辺りですね。そういうところから出てきている瓦で同じようなものを並べておられます。この種のものは以前に、だいぶん古いのですが、一九八七年に福岡市で韓国との国際シンポジウムを福岡県主催でやったのですが、その時に従来見ている瓦とこの主城ヶ原から出ている三八頁の瓦というのはほかに例がなかつた時期なので、当時、非基肄城系の瓦ということで報告をしました。基肄城の瓦というのはまさに百済系の軒丸瓦です。それと三重弧文の軒平瓦の組み合わせです。

三四頁のA、Bですね。Aが百済系の単弁瓦。これは九州にたくさん出てくるものでそのもとは百済の最末期の武王の時代に出来た帝釈寺跡などに出てくる瓦が起源だと思います。そういうものと、この三重弧文の瓦は朝鮮半島ではなくて、近畿の方の山田寺とか川原寺で出てくるものです。そういう組み合せが入つてきます。それで基肄城系の軒丸瓦、これは後に九州の豊前地域などで盛行する百済系単弁瓦の一番古い段階だというようにみています。それに対して三八頁に出しました主城

ケ原のようなもの、これはもとは高句麗にたどられるものとして、四〇頁に近畿のものを出しておきました。近畿の方の平城京などでやつてある瓦の研究会などで使われた資料をここに出しました。その中では全部高句麗系瓦で扱つておられるのですが、実はこれには多少異論がありまして、ストレートに高句麗系ともいえないところがあるのではないか。かつて石田茂作先生が戦争中に出された『総説飛鳥時代寺院址の研究』の中でも特にこの中で一番上に出しているA類ですか、これなどはその当時は一番多いというのが大和の豊浦寺でした。そこで豊浦寺式という名称で高句麗系として処理されておりました。その後、藤沢先生もこれには反対ではないようですね。ところが私どもから見ますと、純粹の高句麗系かといえば若干、変化が起こつておるものですね。特にその右側のB類 と言つているものは我々から見たらこれは百済の单



写真 16 研修室（モニター視聴会場）

弁瓦の要素がかなり入っている。先ほどの基肄城などのものを見てもらいますとかなり近くなっています。それと三八頁の上の段の一番は高句麗系で、二番のものはもう百濟系です。これは基肄城あたりと同じような百濟系のものです。だから大野城の主城ヶ原では高句麗系百濟と言つているようなものと、百濟系と二つ出ているということになります。近畿の方の人たちは百濟末期の基肄城で出るようなものは近畿ではありませんので、それで高句麗系としてそのまま並べてしまつたと思います。

私ども九州で基肄城のような百濟系瓦というものはたくさん見ておりますので、我々の眼から見ますとこのB類、それからこの一番下の段の六のAと書いてあるこういうものはたぶんに百濟の要素が入っている瓦と思います。それから中房、真ん中の蓮子の入つた丸い部分ですね、これが上のA類の方では中房は非常に小さい。中房が小さくて長い弁、さらに単弁が巡るその中に珠紋が一つずつ入つております。これなどはまさに高句麗瓦の特徴をよく残しています。ところがB類になりますと少し様子が違つてきます。それからその下の七のA、三八頁の二番。それから基肄城の瓦ですね、三四頁の基肄城の下左のA、BとありますAですね。これら百濟系単弁軒丸瓦、こういう類のものは百濟では末期になつて出てくるものとして、これらのものは近畿では親しみがないのですが、九州あたりではたくさん出てくる。私自身も九州に出てくる百濟系瓦は当時大和系の瓦だとか九州式単弁だとかいろいろなことが私どもの先学の段階で言われたのですが、やはり百濟だろうということで、それで百濟の扶余の国立博物館に行って探しましたら、博物館の倉庫の中で益山の帝釈寺のものに見出しました。それがきっかけになつてやはり百濟の最末期に近い頃のものとわかりました。最末期といつてもこれは扶余の帝釈寺は六三九年に焼けた寺です。そこに使つていてますからこの原型になるようなもの

は六三〇年以前に百濟では出現しているというところまで推定されます。ところで六三九年に焼けた
という記録は実は百濟には無くて、中国の唐時代の經典の裏書に出てきました。それを見つけたのが
黄寿永(ファンスイヨン)という美術史の先生ですね。この方が帝釈寺の研究という論考を一九七〇年代に発表されて
いるのです。そういう論文が実は私の中で記憶されてました。これは終末期のものなのでこのような
資料は百濟でも非常に少ないものです。帝釈寺は、武王の時に建てた寺です。そこらまで現在わかっ
ているところです。

佐藤…高句麗系の百濟瓦といつても百濟の末期の瓦であるということ、そして今、先生がおっしゃったよ
うに百濟末期の瓦が畿内より九州でたくさん出ているということは、『日本書紀』にみられる憶礼福留、
四比福夫といった百濟亡命將軍と九州の山城とを結び付けたくなりますが、それでもよろしいでしょ
うか。

小田…基肄城あたりは結び付けられるのですが、筑後とか豊前あたりで出てくるものはほとんど寺跡で出
てくるのです。これまで山城の造営に関わった人が郡衙や仏教の寺院にまで関わっているとは思えま
せんので、あの地域の七世紀末か八世紀の前半くらいまでの寺を造る時に百濟系や新羅系の渡来人が
最初に入つて来たですからそういう人たちが関係してくる可能性は多分にあるだろうと思つて
います。

佐藤…ありがとうございます。朝鮮半島からの影響というものを、立体的に考えなくてはいけないという
気がいたします。この七世紀後半には、日本書紀に書いてありますが、関東地方に百濟の人だけでは
なくて高句麗からも新羅からも渡来人がたくさん来ております。関東地方に安置された渡来人たちが、

その場所で寺を當んだ時に、その瓦は百濟式か新羅式か高句麗式かということをよく考えたりしますが、そういう場合にも、今のお話のように三国を立体的に見ていく必要があるだらうと思いました。東アジアとの関係については、石井さんのご講演があつたのですが、先ほどのお話の補足も含めて少しお話していただけませんでしょうか。

石井：はい、それでは私、お話の中で少し補足をしておきたい部分がございますので、まずお話をしますと、鴻臚館の武装化、いわば鴻臚館が防衛の最前線になるというお話をしましたが、その鴻臚館から二〇〇三年に鎧の一部、挂甲と呼ばれる鎧の一種ですね、その一部が実際に出てきています、発掘されていて本日ご説明した内容が実際に行われていたこと、これを裏付けているのではないかと思ひますね。それからもう一点はこの鞠智城、つまり肥後国、直接は鞠智城ではないけれども肥後国に関わる記事として私の年表の八九九年のところをご覧下さい。今回は九、一〇世紀あたりの鞠智城をめぐる情勢について検討をすすめたわけですが、八九九年この四月五日に肥後国に弩師を置くという記事があります。弩というのは「石弓ですね、いわゆるクロスボー、非常に強力な武器ですけれども、その石弓を扱える者を置いたという記事です。この前にも長門とか越後とかそういう要するに沿岸防衛を固めるために事務官を一人削つて、こういう武芸の専門家を置くということが行われていますが、肥後国にもこうした形で八九九年に置かれています。先ほど来、有明海を中心とした地域の防衛に非常に重要な意味を果たしているというお話をしましたけれども、そうした観点から見た時もこの記事は見逃せない記事だらうと思います。ただ問題はこの弩師がどこに配備されたのか、肥後国には四つの軍団があつたといわれていますが、どの軍団に配備されたのか。もちろん兵士制は大きく再編され

るわけですが、こうした選士という者の活動の拠点はどこなのか。あるいは鞠智城なのか。鞠智城の中に詰める場所があつたのかどうか、そういうことを考える際にもこの記事、改めて検討する価値があるだろうと思つております。そしてそのことと関連しますと、今鞠智城には兵舎が一棟復元されています。あれは何間になるのでしょうか、そうとう大きな建物でその中には矢野さんのご説明によりますと、五〇名の兵士が寝泊りできる規模だということです。そして同じ規模の建物が二棟建つている、ということは一〇〇人がおそらく鞠智城城内に常駐していたのではないかというご説明でした。

選士というのは大宰府の場合には一グループが一〇〇人ですね。そうするとこの復元された兵舎に寝泊りしていた兵士一〇〇人という数字ともあつてきますので、そうした意味でこの復元された建物の規模、もう一度改めて注目したいなど、そんなことを考えております。そうした点、若干足りなかつたものですから補足をさせていただきます。有明海の問題については佐藤先生が非常に注目されるものですから、僕が扱つた九世紀、一〇世紀前の有明海のことをお話しいただければと思いますのでよろしくお願ひします。

佐

藤　・有明海側の話としては、『日本書紀』にも肥後の地方豪族が対外関係で活躍したという記録がござります。もちろん江田船山古墳の百濟系の素晴らしい遺物があり、おそらく百濟とも交流していた有力な地方豪族が菊池川流域にいたということだと思います。そういうことも含めて、有明海が決して奥まつた場所ではないということは、石井さんのお話の中の、渤海の遣唐使が天草に着いたとか、新羅の海賊が平戸とか五島を経由してから博多湾に向かうという話からも理解できると思います。今年のNHKの大河ドラマで平清盛の莊園、対外交流をする莊園の話が出てきますけれども、あれも神

崎荘のこととして、神崎荘というのは今の吉野ヶ里遺跡があるところです。あそこが対外交易の最も盛んな荘園だったということを考えれば、有明海は決して奥まつた場所ではないと言つていいのではないかと考えます。石井さんのお話では、昨年の東日本大震災ともからめて九世紀の貞觀の大地震、津波にふれられました。この貞觀年間という時代は、六国史をずっと読めばすぐわかりますが、大変な天変地異が毎年のように続いて大きな被害があり、同じ頃に富士が噴火し、鳥海山が噴火したという、大変な時代であります。肥後国でも地震があつたというお話があつたわけです。こういった天変地異があると、朝廷はまず何をするかというと、最初に占います。しかるべき神祇官とか陰陽寮に占わせて、その占いの結果だいたい出てくるのは兵革・兵乱の兆しではないかということです。本日矢野さんのお話にも出てきた九世紀の半ばくらいに鞠智城の兵庫の鼓が鳴ったとか、鞠智城院の正倉の屋根の茅が鳥によつて抜かれたとかいうことも、やはり天変です。鞠智城がまだそういう兵乱をさし示す兆しを起こしているのではないかということです。本日石井さんは新羅の海賊との関係を指摘されたわけですが、それも含めて鞠智城の兵庫の鼓が鳴るというのも、そういう国家的な対外的危機、兵乱とリンクして記載されているということに気をつけなくてはならないけない。この東アジアとの関係という点では、考古学的には鞠智城の構造や、遺物の面では百濟系の仏像が出るとか高句麗系百濟瓦が出るとか、あるいは版築の工法だとか門の工法だとかいろいろなことがあると思います。これから東アジアとの関係を考古学的にも詰めていこうとすると、どういうところに注意したらいいかということについて、坂井さんにコメントをお願いしたいのですが。

井：的確なことは申し上げにくいのですが、もともと五世紀半ばから後半の江田船山の副葬品が大変大

陸との結びつきが直接あるということははずっと以前から言われています。それから朝鮮半島の南西部に集中する前方後円型の古墳が結構造られています。これについては長い議論がありましたけれども、その墓の形態とか、それから埋葬施設の形態を見ると肥後型であるとか、あるいは北部九州系の石室の関連が強いということが言われております。これもこの九州有明海と朝鮮半島の西海岸から南にかけての地域との結びつきを物語ると、考古学的には言えると思います。それで古代の段階になりますと肥國^{ひのくに}が肥前と肥後に分かれますね。これは現在の古代史研究からすると、天武十二年から十四年にかけて天武天皇が国域を画定していくという作業をしていますが、このときに合わせて広い国が分割されていく可能性が考えられます。肥前と肥後はくつついてないわけですね。土地がくつついてないのに前と後ろ。これは道の口と道のお尻、というふうに読みますが、道そのものも肥前、佐賀県、長崎から海を伝つて熊本県域につながると。これも有明海を介した一体的な考え方を示す事例ですね。今の感覚からするとえーっというふうな感じですが、当時からすればこれは常識的なことであるのも有明海の大きな特徴だと思います。それから考古学的なことは少し別ですけれども、烽です。やはりどうしても『魏志倭人伝』のルート、朝鮮半島から対馬、壱岐、それから松浦^{まつら}という佐賀県の唐津周辺のルートだけを考えてしまいがちです。私自身も鞠智城に行つた時になんてこんなところに古代山城があるのだろうかと非常に疑問でしたけど、いろんなことを学ぶにつけ、その朝鮮半島から二〇〇キロの朝鮮海峡を北部九州に渡つてくるルートの他に東シナ海を介して有明海、八代海を入つてくる極めて強力なルートが存在していると。それが鞠智城の存立基盤といいますか、造られた

背景の大きな理由と考えていいのではないかなど思います。

藤・ありがとうございました。これまでのお話を伺うと、九州の古代山城をとらえる場合、百済との関係だけで考えてはいけないのでないかと思います。瓦についても、朝鮮半島においての高句麗、百済、新羅の瓦のあり方をきちんと分析しないと解けないということだと思います。鞠智城を本当に知ろうと思うと、列島のこと、それから半島についても本当に勉強をしないと理解できない。それくらいの交流があつたのかと思います。いろいろな方向から歴史事象を捉えなくてはいけない。それはまた逆に言うと、鞠智城自身がそういう存在であつたのだと思います。東アジアについては次の第三の話題、第四の話題でも触れると思いますので、これくらいにしましよう。鞠智城の運営、経営をめぐるテーマにお話を移したいと思います。本日坂井さんには地方官衙と鞠智城を比較するご報告をいただきました。東北の城柵は、基本的にはまず行政施設であつてそれにあわせて軍事的な性格も持つということがあつたと思います。西日本の古代山城の場合には軍事的な性格が前面に出るわけではあります、軍事的な性格だけで維持できるか。創建の時は別としてその後維持していくためには行政的な性格も必要になるのではないか。軍団の場合でも、軍毅という代表者を中心として行政的な機能が必要で、あるいは軍団に詰めている人には毎日給食しなくてはいけない。古代の役所には、役人たちへの給食という仕事も必須でした。軍団の場合は一団一、〇〇〇人ですが、日常居住をしているのはある程度限られるわけで、石井さんのお話で一〇〇人からの兵士がいた場合は、彼らを管理する役所があつて一〇〇人以上の人に対して毎日給食をしなくてはいけないということで、それなりの組織が必要になると感じます。そういう意味でみると、鞠智城は行政的な組織をふくむ様々な施設が付随して

いなくてはいけないのではないかと思います。この字配置の建物群を行政区画かと推定していることについては、なお検討も必要だと坂井さんはおつしやったと思います。場所がどこかは別として、そういう施設はやはり必要だしあるいは給食施設も必要だと思いますが、そのへんについてはいかがでしょうか。

坂
井

井：今回の報告の中で一番驚いたこと、目を瞠つたことは、七世紀後半から一〇世紀第3四半期まで約三〇〇年ほど維持されているということですが、その中でも五つに分けた時期ごとに土器を見ていくと、Ⅰ期はちよぼちよぼとあって、Ⅱ期はかなりあると。Ⅲ期つまり八世紀第1四半期後半から八世紀第3四半期まで、要するに奈良時代の間の土器はほとんど見られない。これは結構大きな考古学的な事実だと思います。要するに七〇〇年前後の時代には食器として使つた須恵器の杯ですか、土師器の杯、それから米を煮炊きする土師器の甕かめ、今の言葉で言えばお釜ですが、こういうものが結構出土していく、実際に人が駐在して生活していることがわかります。きちんと食べ物を調理して食べていただ実感があります。ところが、その後奈良時代に入つて間もなくの時期の土器はほとんど出ないということをどう考えればよいのか。全部掘つているわけではないので、掘つていないところにまだあるかも知れませんし、実際はあつたけれどもすでに土が削られているかもしれませんが、貯水池から出ている遺物も、やはりピークが八世紀の初頭前半くらいでぐつと少なくなるということからすると、人々が多く住んで、あそこに詰めていた期間は限られるのではないかと推測されます。これはあくまでも考古資料からですが。そうすると、城にどのような組織があつたのかとかいうことも確かに問題です。東北の城柵の場合には城司、城の司というものが置かれているのですね。例えば越後の場合です

と越後城司、これが威余真人大村いなまひとおむらという人です。中央から派遣された人で、同じ名前の人が越後国の国司でありますから、国司兼、城司として官職を与えられています。そういう行政組織がきちんとあって、そこに役人がいたこともわかりますが、一方古代山城の場合はとその城に関係する行政組織はもう一つはつきりしないような気もします。このへんはむしろ佐藤先生に教えていただきたいと思うところであります。考古資料からあまり的確なコメントができませんが、以上であります。

佐藤：本日、矢野さんのお話にあつたのですけれども、創建の時よりも第Ⅱ期の『続日本紀』に出てくる七世紀の末に修理した段階が最盛期であるといいます。奈良時代に入つた第Ⅲ期は、今の坂井さんのお話のように遺物は少ないけれども礎石建物が出現するということで、八世紀の第4四半期、平安時代初期になると大型の正倉建物が出来てきます。そして第V期は終末期だと思ひます。単純に創建期が一番立派で、段々緊張感が薄れて衰退するということではなくて、今申し上げたような礎石化が八世紀に入つてからであるとか、だけれども日常生活の遺物が少ないとこう総合的に理解するかというのが、報告書が出た段階でのこれから課題だと思ひます。それに関して坂井さん何かございませんでしょうか。こういうところを詰めていけば紐がほどけてくるのではないかというようなサジェスチョンをいただけとあります。

坂井：難しいことです。考古学は考古資料があつてはじめて判断ができるので、今回の報告書の作成にあたつて從来出土していた考古資料、出土した土器類は詳細に検討したといふうに聞いていますので、今まで出たものからすればやはり奈良時代の段階には生活の活動がかなり低調であるということがいえるわけです。ただ全部は掘つておりませんので、まだ調査が及んでいない地区に施設の存在が

佐

考えられる地区があるかについて、私は詳細に理解していないところがあります。もしあればそういうところを今後調査をしていく。それから谷部分はあまり調査をされてなくて、確かに居住区としてはあまり考えられないかもしませんが、城の中の排水施設だとそういうしたものもある可能性がありますので、そういうたとこで遺物が溜まつていなかとか、木簡が、第二第三の木簡が埋もれていなかとか、ということを少し期待したいかなと思います。

藤.. そうですね。さらなる調査に期待せざるを得ないということですね。私は「秦人忍□五斗」の木簡は書風からいって奈良時代でいいと思いますが、これは人名から書きはじめているので、郡内の人気が書いていると思います。菊池郡内の人だから肥後国菊池郡とわざわざ書かなくても済む。上端の左右に切りかきがあるので、荷札だと思います。古代は五斗一俵にしますので一俵の米俵に付けた米の荷札が「秦人忍□五斗」で、この人は菊池郡内に住んでいて、秦氏という渡来系の人ですね。鞠智城の近くにある松尾神社も、京都にある有名な渡来系の人が祀った松尾神社と関係があるということで、大変興味深いわけです。そうするとこの鞠智城の人々の給食を地元の菊池郡の米が支えたのではないのか。こういうことを考えていたので、先ほどのような質問をしてしまいました。このように八世紀、九世紀に礎石立ちになつて建物が立派になることということについて、石井さんいかがでしようか。七世紀から八世紀初めまでという鞠智城の歴史全体の中では一部にあたる創建の時ばかりが注目されやすいのですが、今日石井さんには九世紀の対外関係も論じていただきました。長い目で見て、鞠智城全体の歴史の中で建物の礎石化という変化をどう理解するか、いかがでしようか。

石井.. いや、そのあたりはこれから本当に勉強をしなければというふうに思つていろいろですが、その

問題に直接お答えできるかどうかはわかりませんけれども、鞠智城に関する有名な八五八年の記事、鞠智城の不動倉が十一宇焼けたとあります。十一宇ということは十一軒ということですね。現在復元されている建物は米倉の方でしたかね、米倉の方では何か米ですと一、二〇〇俵入るということですね。それが十一軒、まあその大きさかどうかはわかりません、大小取混せてかもしませんけれどもおそらくそうしたものは礎石建物だと思いますね。瓦葺で確か復元してありましたでしょうか。そうした建物類が次々と建てられていたということですね。特に不動倉とありますから緊急でないと使用しないという目的ですから、これは備蓄のため、いざという時に備えてということですね。鞠智城にこうした不動倉が十一宇以上あつたということ、それがましてや礎石立ちの建物であるということにおいては重要性、ますます増していく感じを抱いております。ただ、一方では文献としてそれを裏付ける記述がないというところですね。そのあたりもこれからのお自身の課題としていきたいと思います。

佐

藤・小田さん、本日は鞠智城の変遷と大宰府の変遷をリンクしてご提示していただいたので、私は大変ありがとうございました。このことは、坂井さんのご報告にもあつたような他の国府や郡家の変遷とも、あるいは九州のさまざまな遺跡の変遷ともリンクして考えるべきだと思います。そういう観点からお考えになつて、今回の報告書で出されたⅤ期の変遷についてご意見がございましたらお願ひしたいのですが。

小田・これは報告書に先立ちまして鞠智城の方で瓦とか土器類を全部含めて検討会をやつていただいたのですが、その結果Ⅴ期の変遷が出てまいりました。その中で私どもも建物のなかで気になつております

すのは掘立柱から礎石立ちの建物へと変わる時期がここでは第Ⅲ期には出てきます。そこでこのⅤ期の変遷について簡単にいいますと、第一期は築城期ですね。お城を造った時期。つきの第Ⅱ期は充実期、中身を充実させていった時期ですね。管理棟が出てきたり八角形の建物が出たりとか。それから第Ⅲ期は逆に停滞した時期ですね、停滞期。この時期に礎石の建物が出てきているので、この時期には必要最低限の人員を配置したのではないかという書き方をされておりますが、この第Ⅲ期は停滞した時期だといわれています。それから第Ⅳ期は今度は変化期、新たに変化していく時期ですね。管理棟がなくなるとか、池の機能が低下するとか、それからこの段階から食糧備蓄の施設機能が主体になつていくというような特徴もあげられています。最後の第Ⅴ期は建物が非常に減少していつておりますが、ここでは不動倉が再建されておるということ。そして一〇世紀の第3四半期で完全に停止するというような流れが出てきています。このような流れをずっとみますとやはり八世紀の第Ⅲの時期が非常にブランク状態になつてくるという時期ですね。あるいはこの時期に新羅あたりの脅威がもうあらわれてくるのかなあという感じも受けております。それからもう一つはよく出てきますのが肥後の場合、兵庫が鳴つたとか、倉庫群が焼けたとか、それから鼓が鳴つたとかの記事です。これは筑前の方でも同じような時期に志摩郡の兵庫の鼓が鳴つたり、兵庫の中の弓矢が鳴つたとかの記事があります。これは鞠智城が八五八年、八五九年には筑前にもそういう怪異現象が出来ます。それから大宰府でも、これは石井先生の資料の中にもあつたのですが八六九年に新羅の海賊が来て絹綿を盗つて行つたというのですけれども、さらに大鳥が現れて大宰府の政庁とか門だとか。それから兵庫などに鳥がたくさん出てきたというようなことがあります。また八七〇

小

佐

年になりますと肥前国の鹿島郡の兵庫が振動したり鼓が鳴つたとか、二声鳴いたとか、そういう記事が出ますね。さらにつづいて八七九年に肥後の菊池郡の城院の戸が独りでに鳴つたという記事がございます。おそらくその流れでみますとこれは新羅の海賊が出てくる、そういう時期の新羅に対する脅威というのかそういうことを考えてはどうか。こういう怪異現象がずらつと並んで出てくるというのは、そういうことと関係があるのではないか。これは石井先生も言わっていたようなところですね。このような現象は肥後だけでなく九州の筑前や肥前などでも起こっているということになりますと、新羅との関係ということを考えなくてはいけないのではないか。そういうことを考えているところです。

藤…ありがとうございました。ここでもう時間になつてしましました。最後に一言ずつ先生方にお願いしようと思つていたのは、鞠智城の果たした機能、目的です。これまで対外防衛の前進基地あるいは兵站基地、あるいは財政的な備蓄の機能、あるいは隼人に対する前進基地、あるいは国内の地方統治のための施設という考え方も最近の古代山城研究にはあるようです。先生方、鞠智城の果たした機能をどのようにお考えか、一言ずつ順番にお話いただいて閉じたいと思います。小田さんからいかがでしょうか。

田…これはよく東北の場合と対置されていますが、東北の場合はもう最前線基地で、政治をやるところ、即、軍防基地だという考え方ですね。九州の場合は大宰府があり、それぞれの国に国府があり、そしてまた城が出てくるというところ、その辺の様子は少し東北の状態と違うのではないかという、確かに坂井先生も同様なことを言われていたと思います。確かにそうだと思います。それから本日私が発表しましたものは特に創立の年代だとか、瓦だとか門跡のことなどに触れたのですが、実はまだその他に

もこれから検討しないといけないようなテーマがたくさんあります。どうも鞠智城というのはまだまだ懐が深い。これから整備に入るのですが、研究のネタはまだたくさんあると思っておりますので、どうぞ鞠智城の皆さんや、若い方々にもお願ひしたいのは私の代では全部はしきれないと思いますし、そういうテーマは私の方でもまだ幾らでも出せますから、何とか次の世代の方々に引き継いでやってもらいたいと思います。まだまだテーマはたくさん鞠智城の中に転がっています。

藤..ありがとうございます。石井さん。

石井..まだまだ小田先生には元気でやつていただかないと困りますけど。僕の場合には資料篇六二頁のやはり地図ですね。これを見ますと肥後国は東シナ海あるいはその北の方からの受け皿になつていると、いうことでいろんな地域との交流が行われていた可能性、そうした中で鞠智城というものをどう位置づけていったらいいのか、そういうところをこれから課題にしたいし、また、発掘調査においてもこれからどのようなものが出でてくるのか、非常に楽しみに待ちたいと思っております。

藤..それでは、坂井さん。

坂井..私も今回いただいた機会でいろんなことを勉強させていただいて、本当に感謝申し上げたいと思います。鞠智城については私のまだ浅い理解ですとやはり対外防衛というのがかなり大きいのではないかという印象を持ちました。それで本日は官衙、役所の話をしましたが、郡の役所はだいたい西暦でいうと八〇〇、九〇〇年を境にした頃に、ほぼ全国的に廃絶して既に再建されなくなります。これは律令国家の仕組みが大きく揺らいでいつて、既にそういう役所を再建しない世の中になつて、必要としない世の中に変質しているということだと思います。これに少し遅れて国の役所も国序という

建物もだいたい一〇世紀の後半くらいになるとほとんど維持されなくなる。壊れたままに放置されてしまうと。そういう中で大宰府は純友乱で焼かれた後も更に再建するということで、少しというかなり違う様相をみせます。そういう郡の役所と国の役所のあり方はまさにこの鞠智城の盛衰とほぼ一致していまして、その律令国家のあり方の中で経営、維持されていたものがその変質、崩壊とともに役割を終えたと。当然、唐が九〇〇何年か、一〇世紀のはじめ無くなっていますし、新羅も九三〇年頃でしょうかね、滅亡していますから敵国がいなくなつたということもあるのでしょうかが、律令国家、体制が大きく変わっていると。これは発掘調査をしていると律令国家体制とその後の体制では全然違います。ムラの形も違いますし、使つている焼き物も違います。その違いを鞠智城の盛衰にもみられる、大きく関連しているということを確認させていただいたと思います。どうもありがとうございました。

藤…ありがとうございます。時間が足りなくなつてしまい申し訳ありません。鞠智城に関しては、ここまでわかつたにも関わらずまだまだこれから楽しみな研究テーマがたくさんあるということがおわかりいただけたかと思ひます。その一端を本日、お知りいただけたと思つております。なお、熊本県教育委員会では今年度全国の若手研究者に公募をして、研究テーマを出していただいて、鞠智城に関する研究に補助金を差し上げているそうとして、その研究発表会が来年の三月二日に開催されるということです。小田さんの世代にもまだまだご研究いただくのですけど、若い方々にも新しい視覚で鞠智城を研究していただけるのではないかと思ひます。本日は私の不手際で、時間がおしてしまいましたが、お付き合いいただきましてどうもありがとうございました。